
かむばっく！記憶～魔法を添えて～

沌弩羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

かむばっく！記憶～魔法を添えて～

【Zコード】

Z5223Z

【作者名】

沌警羅

【あらすじ】

記憶を残したまま転生してきた一人は、記憶を取り戻すために魔王を倒しに行く。

その途中に待ち受けた強敵の数々、そして夢の世界と現実世界が：ちなみに、料理名みたいなタイトルですが、料理関係では一切ございません。

魔法関連集『本文後に読むのがお薦め』

『クリティカルボルトレンジ・マジック
絶雷』 強呪文 MP 消費 5

『オーバーブレイク パワーポイント
上限破壊【力型】』 普通呪文 MP 消費 3

『ブレイク・ツックル ノーマル・マジック
崩壊拳』 普通呪文 MP 消費 2

『ブレイク・エフェクト アンダー・マジック
効果消去』 弱呪文 MP 消費 2

これ以降にも本遍で登場していった呪文は、本遍で登場してから、
ここに乗せたいと思つてゐるのでよろしくお願ひいたします。

魔法関連集『本文後に読むのがお薦め』（後書き）

MPの消費計算などが合わない場合があつたら教えてください。

story1 ~現実世界~ (前書き)

文章が下手ですので読みづらうこと思こますがよろしくお願いします。

IJUは、マジックグローブワールド魔法発展世界セインクル

俺は、サカモトコウシ阪元勇志。高校1年生。IJUの世界では、小魔法学校、中魔法学校、高魔法学校、魔法学校の四つの学校があり、それぞれ小学校、中学校、高校、魔校と呼ばれている。

「あ～疲れたねえ、勇志い！あ、そういうえば今日出た宿題なんだけどさあ～…………」

隣でしゃべってるのは、マガリレコ真狩蓮子。幼馴染の関係だ。なぜだか語尾が延びる癖がある。

「ねえ～、私の話聞いてるう～？せつせからぶつぶつなに言つてんのよ？」

頭の中で設定を読者に話していたはずがいつの間にか口に出していったらしい。

「またなんか言つてるよ。設定とか読者とか……あ、もしかして説明してたでしょお！そういうのは、作者の人がなんとかしてくれんだから、私たちは気にしなくていいんだよ。あ！作者とかいちゃつたあ！」

結構間抜けだな……ま、そういうところがまたかわいいんだけどな。それじゃ、いつからの説明は蓮子の言つたとおりに作者に任せよう。

『IJUの世界は魔法つまり、道具をなにも使わずに火をおこしたりす

ることなどの魔法が発達している世界だ。

そもそも魔法とは、魔法の難しさや魔法体力によつてランクを分けられており、下から最低呪文フイスト・マジック、弱呪文アンダーマジック、普通呪文ストレング・マジック、強呪文ストレンジ・マジック、最強呪文マジック・マジック、禁止呪文ジック、禁止呪文ビレボウ・マジックに分けられている。

禁止呪文を使った場合、即行で地獄ヘル監獄ブリズン行きとなる。』

俺は今、蓮子と下校中だ。

「ねえねえ勇志い。今日わかつたことあつたあ？」

「いや、やっぱ思い出せね。おまえのほうはどうなんだ？」
「私のほうもダメえ。やっぱり私たちが前世でも知り合いだつたつてことしかわかんないよお。」

俺たちはこの世界でも1000人に1、2人の前世記憶保持者だ。しかも知り合いだつたんだから驚きだ。

「ん~、やっぱあいつに聞くしかねーか。」

「そうだねえ~、しかたないよねえ。」
「ん? あいつは誰かつて?」

それは・・・・・

To be continue . . .

story1 ↪ 現実世界 ↪ (後書き)

誤字脱字等「」や「」あしたら教えてください。

これから新連載始めます。

投稿遅いので気長に待つてください。

ん？あいつは誰かつて？

それは・・・・・

俺たちと同じ前世記憶保持者の、漆原賢だ。

こいつは俺たちと同じ高校一年だ。しかしこいつの頭脳の良さと魔法体力は通常ではありえないくらいの高さを誇っている。だから現在、転生について研究しているこいつに聞けばわかるかもしないということだ。

ま、今までに何回も聞いてるけどな・・・

「おーい、いるかー。」

「いますかあー。」

少ししてから返事があつた。

「……ふあーい、だれですかー、新聞なりこりないですよー。」

どうやら寝ていたらしい。

「俺だよ、お・れ！阪元だよー。」

「そしてこつちはあ、蓮子だよ。」

「あ～久しぶり、勇志に蓮ちゃん、今日はじつしたの？」「いつもこのぐだりから会話は始まる。

「ここに来たら決まってんだろ、前世の記憶についてだよ。」

「あ～、またそれについてか。じつは一つかなり重要な情報が手に入つたんだよ。聞きたい？」

「聞きたいよ。お。」

「俺も同じく。」

「じゃあ、一度だけ呟つよ。結構秘密なことだからね。じつはここ工ギラス城下町の北のほうにカガラズ城があるだろ、そこに転生指輪についての古文書が置いてあつたらしいんだ。

しかし、それが何者かに盗まれたらしいんだ。

「それって誰だったの？」

「まあ落ち着いて聞いてくれよ。それはだいたい見当がついてるんだ。それは、坂寄怜生。こいつも前世記憶保持者だ。さらに最近では、最強呪文の魔族転身で魔王を目指しているらしいんだ。すでに世界のあちこちに魔物をばらまいているらしい。だから勇志、世界を旅してこいつから古文書を取り返してくれないか？」

「わかった。蓮子はここで待ってる。すぐ戻ってくる。」

「えつ？私も行くよ。」

「やめときなよ、蓮ちゃん。あぶないよ。そもそも蓮ちゃんは攻撃呪文が使えないんだよ。危ないよ。」

「でもお、回復呪文なら使えるよ。だから……グスン……連れてつてよお～。」

「わかったよ。俺は、回復呪文が使えない。だから助けてくれるか？」

「うん！私頑張るよー！じゃあ明日、早速カガラズ城に行こう。とりあえず、今日家に帰って準備をして、明日朝七時に時計台の前でいいか？」

「うん。じゃあまた明日。」

こつして俺は、蓮子とともに旅に出ることになった。

story2 ～現実世界～（後書き）

第一話投稿しました。

誤字脱字報告等ございましたらよろしくお願いします。

俺たちは今からガガラス王に会いに行くところだ。

「勇志い。ガガラス王ってどんな感じかなあ～？」

「ん～。俺の予想だとフツーに髪がはえてて、王冠がぶつてる感じ？」

「あ～わかるかも。」

そんな感じの話をしながら城へと入ろうとするが、門の前に立っている兵士に止められた。

「おい、そこの若者たちよ。止まれい。」

「え？」

「城への入城理由を述べよ。」

「勇志い。じうじよい…」

「俺に任せろ。兵士さん。俺たちは前世記憶保持者です。それでこの城には転生指輪リバース・リングの古文書があったと聞きました。それについて聞かせてもらおうと思つて、やってきました。」

「理由は分かつた。しかし近ごろは物騒な世の中になり、王の命を狙つものが増えてきているのだ。もちろんそなたたちを、信じていないわけではない。しかし念のためと思つて、行つてほしいことがある。」

「それはなんですか？」

「ここから東に行つたところに、魔性の森がある。そこはの最奥に祠がある。そのなかに前世記憶保持者にしか触れることのできないつるぎが、置いてある。それを持ってきてもらおう。」

「それを持ってくれば、王に会わせてくれるんですか？」

「もちろんだ。」

「蓮子。聞いたか？明日にその森に行くぞ。」

「うん！わかったあ。」

俺たちは、歩き出そうとしたとき兵士に呼び止められた。

「待て。一つ忠告がある。魔性の森には魔物が出る。倒すには呪文はもちろん、武器も必要だ。

そこで一人に武器を授ける。ほれ、男のほうにはこれを、女のほうにはこれだ。」

俺は鉄製の剣を、蓮子には樅の木でできた杖をくれた。

「健闘を祈るぞ！」

「はい！」

俺たちはとりあえず、宿へ向かった。

「いらっしゃいませ。何名様ですか？」

「一人です（う）」

「ふふ、仲のいいこと。どうしますか？一人一部屋にしますか？それとも一人一部屋にしますか？」

「どっちがいい？」

「どっちでもいいよ。」

「それじゃあ一人一部屋で。そっちのほうが安いですよね？」

「はい。では、部屋へ案内しますね。部屋番号は【201】号室です。」

次の日

「おい、蓮子、蓮子起きる。」

「……ん……んん。……おはよ。」

「おはよ。今日は魔性の森に行く日だぞ。」

「うん。」

俺たちは、手早く準備して森へ向かった。

阪元勇志 L V 1

H P 3 2

M P 1 6

力 10 + 5 (鉄のつるぎ)

防 10 + 3 (平民の服)

真狩蓮子 L V 1

H P 2 4

M P 2 4

力 5 + 3 (櫻の杖)

防 5 + 3 (平民の服)

To be continue . . .

story3 ～現実世界～（後書き）

三話、書き終わりました。

最後のパラメーターみたいなやつは今のところは特に何も考えてないでおまけだと思つてください。

俺たちは、今魔性の森にいる。

ない。

勇志い。
休憩しないい？

「そりだな。俺もちょいと脚がつらくなってきたところだ。

パンと干し肉を取り出した。

量視のほほは珍しい

そんな話をしていると川の辺へかどなにかか近付いてきた。

「ん？ 何かが近付いてきたぞ！」

俺たちは武器を構えた。

そんな叫び声とともに、魔物が現れた！

「ん? どこかで見た」とかあるぞ?」

そうだ、あの魚のような顔、強靭な肉体、そして、なんばは船一隻を超えるであろうその巨体、そうだ！

【母乳の状態】

ことを考へて、いる暇はない！

たしかあいつの魔物階級はランク、ふつうにには住んでいるはずのない魔物だ。

それが「んなう」じゃねえや…… どなうでいるんだ。

俺は、精神を集中させ呪文を唱えた。

「『絶雷』！」

フィッシュマン

すると突如相手の魚人兵が神の怒りのような強い落雷に襲われた。

やつたか？

しかし相手は、大ダメージどころか傷一つ付いてない。

わかつた。その前に蓮子、昨日覚えたばかりのあの補助呪文を使つてくれ!!

「え? でもあれをつかつたやつ

「いいから早く！あれがないと勝てないんだ！」
オババブレイク パワーポイント

「……分かつた。いくよ……『上限破壊【力型】』…………」

この呪文は、名前の通り攻撃力の上限をなくす呪文だ。
しかしこの呪文には一つ弱点がある。それは・・・

守備がゼロになつてしまふのだ。

つまり【攻撃を当てたほうが勝ち】なのだ。

魚人兵は、腕を振り上げ蓮子に叩きつけようとした。

卷之三

阪元勇志 Lv1

HP 32

MP 11

『特殊』 上限破壊 オーバーブレイク 【力型】 パワーポイント 効果により +5 (鉄のつるぎ)

『特殊』 上限破壊 オーバーブレイク 【力型】 パワーポイント 効果により +0 +3 (平民の服)

真狩蓮子 Lv1

HP 24

MP 21

力 5 + 3 (樅の杖)
防 5 + 3 (平民の服)

To be continue . . .

story4 ～現実世界～（後書き）

初めての戦闘描写でした。ふう（^_^ゞ
次回で戦いを終わらせるつもりです。

俺はあいつと交差した！

- 1 -

「グフツ・・・、ヘツやるな〜だが俺もお前に負けてばかりもいな
いぜ。」

やつはかなりのダメージを負つた。今だつ！――！――！――！――！
「死ね――！」

あいつの口に何か光る結晶の様なものが集まつたかと思つと、それはひと山ほどはありそうな塊となり、光線状にこぢりに吐き出してきたのだ！－！

「ヤベツ！」

俺はとつさに回避しようとした。が、それはとてつもない太さだつた。まさかこれが魚人兵族 最狂の技、魚人壊滅砲だというのか！ 幸い俺は、かするだけで済んだが、ぶち当たつてたらどうなつていたのか考えるのも恐ろしい。

一ふつ・・・さすがに初戦闘でこいつを倒すのは無理か？だが俺は
やらなくちゃ・・・いけね―――――――――――――― んだよオオオオ
オオオオ！

そして俺は、蓮子にある指示を出した。

「おれに、俺にもう一度、
『上限破壊【力型】』を唱えてくれっ！」

1

「いいからやつてくれ……！」

「 分かつた、でも一つだけ

つむぎとお、体が粉々になっちゃつた。

「うな。二へよおーーー!』上限破壊【力型】

俺は、今までに感じたことがないすさまじい力を手に入れた。しかし、風が痛い。風が吹く度に全身に、激痛がはしる。正直、三秒持たないかもしれない・・・ここで決めてやる・・・

やつはまた魔力をため、呪文を唱えようとした。

! . ! . ! . ! . !

『 』

凄まじい風切り音とともに、やつは吹つ飛び粉々に砕け散つた。
「勇志い！ やつたねえ！ あ、忘れてたあ。『効果消去』ブレイク・エフェクト

勇志い！やったねえ！あ
忘れてたね
效果消去

よし、これで効果は切れたよ。」

「そ……そつか……」

「勇志い。勇志い～～」

蓮子の声が遠ざかっていく……そして俺はそのまま氣を失ってしまった……

阪元勇志 L V 1

H P 0 8

M P 0 9

力 1 0 + 0 5 (鉄のつるぎ)

防 1 0 + 0 3 (平民の服)

真狩蓮子 L V 1

H P 2 4

M P 1 6

力 0 5 + 0 3 (樅の杖)

防 0 5 + 0 3 (平民の服)

To be continue . . .

story5 ～現実世界～（後書き）

やつと、戦闘が終わりました。

次回は祠の前に行くところです。

誤字脱字ありましたらお願いします。

俺は不思議なところにいた。
見たこともない場所だった。先が見えない野原。水平線。山々。
とてもきれいな場所だった。まるで……

そう、まるで……

RPGの様な世界だ。向こうのほうには大きなお城まである。

「ん！？ ここは……どこだ……」

俺はとりあえず城のほうまで歩いてみることにした。

ああ、のどが渴いた……

城まで行つたら休憩しよう……

そして、歩き始めてから20分ほどたつた。

「ついた。」

俺は宿へと向かつた。

「すいませーん。」

少ししてあわてておくから走つてきた。

「お待たせしました。おひとり様ですね。あれむあ、珍しい服ですね。異国のものですか？」

俺は自分の服とこの人の服を見比べてみた。

俺は黒いパークーにジーパン、それに比べてこの人は珍しい何とも言えない服を着ている。紫や赤がしま状に縦に縫われていた。

「ま、まあそんなところです。」

「あ、お部屋はこちいらです。」

俺は、部屋に案内された。そしてここまでの事を振り返った。

冷静に考えたら、おかしい。

俺は確か、魚人兵フィッシュマンを倒したんだ：

その後に…… そうだ！ 気絶したんだ。

そしたら突然こんなところに… どうなつてんだ…

ま、考へても仕方ない。とりあえずゆつくり休んで手掛けりを探そ
う…

チュン…… チュンチュン

「いや、それはやめといたほうがいいよ、今あの城には悪魔が住み着いてるって噂だ。勇者でも来ない限りどうにもできない。」

「そうですか。わかりました。」

「じゃあね。良い旅を。」

「悪魔…？誰なんだろう…？」

まあいい。行つてみるしかないんだから。

すっかり、夜も更けてきたな。とりあえず今日はここで野宿でもするか。

そうして俺は、夢の中へと落ちて行つた。

そして夢を見た…

『あなたは、いま、とても混乱しています。しかしいずれすべてがわかる時が来るでしょう。それまで、どうか…生きていてください。あなたはとても大切で重要な人です。どうか…どうか…』
不思議な夢だ…とても美しい女の人が語りかけてきた。

そして目覚めた…

To be continue . . .

story6 ～夢世界～（後書き）

投稿遅くなりました。

次回は、今度こそ祠に行きます。

「勇志いー、勇志いー！」

ん、この声は・・・

目を開けたら蓮子が俺のことを見下ろしている。

「……ん。俺は野宿してたんじゃなかつたんだつけか？」

「へ？ なに言つてゐの？ ここはカガラス城下町の宿だよ。」

帰つてきた…のか？

「もう、三日も寝てたんだよ。大丈夫う？」

「あ、ああ。ちょっと変な夢を見てたとこだ。それより俺をどうやって宿まで連れてきたんだ？ おまえひとりじゃ俺を運ぶのは無理だろ？」

「それがねえ。どこからか女の人が出てきてその人が呪文を使つたらここまで来たんだあ。

その呪文がねえ。聞いたこともないような呪文でねえ、たしかあー

・『ジヤンなんとか』つていつたかなあ。」

「さうか…。明日、もう一度森に行って、つるぎを取りに行こ。」

「うん。」

「勇志起きてえー。朝だよおー。」

「ああ。じやあ行こうか。」

「勇志起きてえー。朝だよおー。」

小悪魔や液体生物アメバが出てきたがあの魚人兵フィッシュマンを倒した俺たちにとって
は、弱い敵だった。レベルを上げるには最適だった。

俺たちはそれぞれ3レベまであがつた。新しい魔法も覚えた。まあ、それは今度でいいだろ。

そうして俺たちは祠までたどり着いた。

「勇志い。これが祠かな？」

目の前の看板には『コノサキホコラ。ヒキカエスナラ、イマ。』と
書かれていた。

「そうだろう。それより『ヒキカエスナラ、イマ。』ってどういう
ことだろ？』

「そのまんまの意味だよ。帰るなら今つて教えてくれてるんだよ
お。』

「そんのはわーつてるよ…………そつじゃなくて、ここまで来て
帰るやつはフツーいねーだろ？」

「確かにい。』

「なのにここに立ててあるつてことは祠に何かあるんだよ。』

「なるほど！』

「だから氣をつけていこうな。』

「うん！』

タツタツタツタツタ

「うわあああああ！』

……

「落ちた。」

蓮子は穴に落ちた。だから書いたのさ。

だいじょぶそうでよかつた…

俺はその穴に下りて行つた……

阪元勇志 LV03

M P 2 0

力12+05（鉄のつるぎ）
防12+03（平民の服）

真狩蓮子 LV03

M H
P P
3 2
0 8

力08+03（樅の杖）

防08+03（平民の服）

To
be
con-
tinue
.
..

story7 ～現実世界～（後書き）

投稿できるときにはいつかにしたいとおもいます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5223z/>

かむばっく！記憶～魔法を添えて～

2012年1月12日23時09分発行